

接頭辞の語源とその意味について

英語とラテン語を中心に

森 田 信 也

Abstract

This paper examines prefixation in several Indo-European languages. English *over-* corresponds to German *über-* and French *sur-* from an etymological point of view, but instead of *over-*, *out-* appears as a prefix morphologically.

English *un-* and German *ent-* are derived from the same root IE **ant-*, which means ‘opposite.’ Therefore, their internal linguistic form is said to be the same in verbal prefixation. Latin *dis-* is derived from IE **dwo-*, which means ‘two.’ Reflecting the fact, *dis-* has some affinity with an idea of division or separation.

Latin *ab* and *post* are derived from IE **apo-*. In addition, English *after* is also derived from the same root. IE **upo-* means ‘under, up from under.’ English *up* and *above* are derived from this root, while Latin *sub-* ‘under’ is also derived from the same root. It can be thought that ‘upward’ and ‘downward’ have something in common in vertical direction.

Furthermore, a door may be regarded either as that which ‘turns’ (on its thongs, pivots, or hinges) or that which shuts or ‘encloses.’ Judging from that, it is reasonable to think that Latin *aperiō* and *operiō* are derived from IE **wer-* and the semantical distinction is made by prefixation. Likewise, the same thing happens to German *aufmachen* ‘to open’ and *zumachen* ‘to close.’ This is also true of French *ouvrir* and *couvrir*. In a nutshell, when events with the same ‘vector’ and different directions happen, in some cases the distinction between these two directions seems to have been made by prefixation in Indo-European.

0. はじめに

The door is unlocked. の意味は、アスペクトによって、「解錠する」という意味と「施錠されていない」という意味の両義性を見せる。このように、英語の接頭辞 *un-* は、形容詞に付くと「否定」の意味になるが、動詞に付くと「反対動作」を意味する。他のヨーロッパ語のいくつかについても、語源を遡って、特に動詞の接頭辞としてアスペクト的にどのような意味役割を担うのか、また、印欧祖語では prefixation がどのような機能を持ち、どのような意味役割を担っていたか、いくつかの生産力のある接頭辞について、本稿では比較検討することにする。

1. 印欧祖語の **ant-*

**Ant-* という語根からは、多くの語が派生している。元々は、「正面・ひたい」という意味であったが、空間的な意味での「前」と時間的な意味での「前」の両方を示すようになった。さらに、空間的な「前」からは、「対峙する」という観念が生じ、「対」という意味も持つようになった。Germanic の **andi-* は Old English では *and-* になり、「反対」を意味するするが、Modern English では、*anti-slavery* のような *anti-* という形で生き残っている。Old English *andswaru* は、Modern English では *answer* だが、語源的には、*and-* ‘against’ + *swaru* ‘swearing’ で、目の前に突き付けられた事柄に対して「反駁する」という意味が、現在では「答える」という意味に変化している。Modern English *along* も、Old English では *andlang*, *and-* ‘against’ + *lang* ‘long’ で、*long* の持つ本来的な意味 ‘great

from end to end' と *and-* と同根の *end* のニュアンスとを考えれば、Modern English の *along* の意味へと無理なくつながってゆく。また、Old English *andlænge dæge* は、'all day long' の意で、古英語でも「時間的な広がり」のニュアンスがあることが分かる。

この Old English の *and-* は、弱形で *un-*, *on-*, *an-* になり、Modern English では、*unbind* などに見られるように、「反対・逆行の動作」を示す *un-* という verbal prefix として生き残っている。また、Modern German では、*ent-* という非分離の前綴りとして存在するものであり、*entbinden* 'unbind' のように、生産力のある前綴りとして生き残っている。名詞の場合は、*Antwort* 'answer' のように、*Ant-* となる。

IE **ant-* からは、Latin *ante* 'before, in front of, against' も生じており、後に **abante* (*ab* 'off/away' + *ante* 'before') を経て、フランス語では *avant* 'before'、英語では *advance* に発展する。この英語の *advance* の *ad-* は、16 世紀当時の接頭辞 *a-* (L *ab-*/F *av-*) を *ad->a-* と混同したことから生じたものである。また、英語の *ancient* は、本来 *ante* + *-anus* で、フランス語では *ancien* であるが、これは 15 世紀当時、分詞の語尾 *-nd/-nt* の *-d/-t* を脱落させる傾向があったので、「語源に忠実に」というスローガンを盲信しすぎたため、表面的な民間語源の知識で、表記法が定着したことによる「行き過ぎ」であった。つまり、*ancien* は *-ent* の *-t* が落ちた形で、それを元の形に戻すのが正しいと考えて、逆に不必要な *-t* を付加してしまったのである。本来の語源は、*ante* + *-anus* で、この *-anus* は *urban* や *American* という語にみられるように、形容詞を派生させる接尾語であり、現在でも、*-an* という形で生き残っている。

1.1 英語の *un-*

英語とドイツ語の場合、前綴りと本源動詞との音声的な同化について考察してみると、*unbind* は *un-* の *-n* が本源動詞の *b* に同化されず、**umbind* とはならないのは、*bind* という本源動詞に対して、前綴りの独立性が非常に高いことを意味しており、*un-* と *bind* の間に juncture が存在すると言い換えることができよう。

1.2 ドイツ語の *ent-*

ドイツ語の非分離の前綴り、*ent-* は、*empfangen* 「受け入れる」*empfehlen* 「推薦する」*empfinden* 「感じる」などの *f* で始まる本源動詞の一部の動詞を除いては *emp-* のように同化を起こさず、とりわけ、*entfalten* 「(巻いたもの・畳んだものを) ひろげる」*entfesseln* 「(束縛を) 解く」*entflechten* 「(もつれているものを) 解きほどく」のような、英語の *un-* と同じく「反対動作」を意味する場合は、一つも同化を起こさないのである。

2. 印欧祖語の **ud-*

印欧語根 **ud-* からは、英語の *out* やドイツ語の *aus*、また、英語の *but* や *about* なども派生している。また、ドイツ語では、接頭辞 *ur-* とその弱形で非分離の前綴りである *er-* も同根である。

一方、ラテン語では、*us-que* が出ており、この語源に関しては 2 つの見解がある。Lewis and Short (1933) によれば、*ubi* の古形の locative に *quis* の古形の ablative の形が compound になったものとあるのに対し、Tucker (1931) では、**u* に **d* (<*de*) が付いたものという見方をしている。いずれにしても、「～から」という観念を伴っている。

古英語の *butan* (*be* 'by' + *ut* 'out' + *-an*) と *onbutan* (*on* + *by* + *out*) や *ymbutan* (*around* + *by* + *out*) も同根で、ラテン語の *autem* も *aut* と *-em* が compound になった語であるが、古英語もラテン語も 'compound' で同じような意味を持つに至っているのは偶然ではない。つまり、「外側」にあるもの、

あるいは、on the other hand という概念から、接続詞の用法が生じたと考えられる。

2. 1 out-

ここで、out-を含む語を具体的に分析してみることにする。本稿で取り上げるのは、out-V という構造を持つ動詞で、‘X out-V Y’の意味が、「X は Y より～の点で勝っている」という意味になる場合を考察することにする。

基本的に、この prefixation の特徴は、「out + 自動詞」か、「out + 名詞」で他動詞を形成するというものである。とりわけ、自動詞の場合は、どんな種類の動詞にも out- との合成が可能である。しかし、他動詞の場合、目的語を表示せずに使える場合は問題ないが、目的語の表示が義務的な他動詞では合成は許されない。以下にそのパターンを示す。

2. 1. 1 out + 非対格動詞：

outgrow, outlive, outweigh など

outlast: überdauern, überleben: survivre à

outlive: überleben

outshine: surpasser (qch.) en clat

outweigh: peser plus que (qch.), l'emporter sur (qch.)

2. 1. 2 out + 非能格動詞：

outrun, outtalk, outwork など

2. 1. 3 out + 自動詞的他動詞：

outsing, outsell, outhrow など

outbid: überbieten: surenchérir sur, surpasser

outdo: übertreffen, überbieten: surpasser, l'emporter, renchérir

outfight

outplay

outperform: überbieten

outstrip: überflügeln, übersteigen

2. 1. 4 out + 名詞

outclass: überlegen sein + dat, surclasser

outnumber: l'emporter en nombre sur (l'ennemi, etc.)

outpace: ausstechen

outfox: austricksen

outmanoeuvre: überlisten, ausstechen, ausmanövrieren: l'emporter sur (l'ennemi) en tactique

outrival: surpasser sur, l'emporter sur (qn)

outvote: überstimmen

outwit: überlisten

2. 1. 5 out + 他動詞:

**outlike*, **outmake*, **outcarry* などは意味の上から argument structure レベルで目的語が義務的なので、合成語の形成は不可能である¹⁾

2. 2 分析と考察

これらを分析してみると、おおよそ prefix としては、英語の *out-* に対して、ドイツ語では *über-* が対応し、フランス語では *sur-* または *l'emporter* が対応している。本来は、IE **uper* (i) からドイツ語では *oben* や *über* が生じ、またフランス語の *sur* はラテン語 *super* < **eks-uper* から生じているので、ドイツ語もフランス語も接頭辞は同根からのものである²⁾。つまり、内的言語形態としては、ドイツ語とフランス語は等しいが、英語では、同根の *over-* の代わりに *out-* が現れている。

一方、ドイツ語の分離動詞の前綴り *aus-* であるが、

- 1) 静止の状態を表し「外に・外で」
- 2) 運動の方向を表し「外へ向かって」
 - a) 自動詞と共に *ausgehen* 「出発」や *ausarten* 「逸脱」
 - b) 他動詞と共に「主語からの離脱」*ausatmen* (吐き出す)、「主語以外のものからの離脱」*ausgraben* (掘り出す)、「対象の一部分の拡大」*ausdehnen* (拡張する)、「選択」*auswählen* (選び出す)、「排除」*aussperren* (締め出す)

など、もっぱら文字通り「外」の概念を含意する分離動詞を形成している³⁾。

2. 3 その他の word formation

Hoad(1986:328):

on intransitive verbal phrases such as *break out*, *cry out*, *fit out*, *lay out*, *look out* were formed *outbreak*, *outcry*, *outfit*, *outlay*, *outlook*.

上記の英語の word formation では、対応するドイツ語でも *Aus-* となっており、この場合は内的言語形態が等しいと言える。

break out: ausbrechen > *outbreak*: Ausbruch

cry out: aufschreien > *outcry*: Entrüstung

fit out: ausstatten, ausrüsten > *outfit*: Ausrüstung

lay out: ausbreiten > *outlay*: Ausgaben

look out: hinaus-/heraussehen > *outlook*: Aussicht

3. 印欧祖語の **dwo-*

印欧祖語では **dwo-* 'two' から、「2」という概念を含む語が派生された。印欧祖語の /d/ は、グリムの音韻法則によりゲルマン語では /t/ となるので、Germanic の **bi-twihna* 'at the middle point of two' は、OE では *betweonum*、ModE では *between* となる。また、ラテン語では *bis* 'twice' が生じているが、これは、**g^wem-* から、ゲルマン語では *kuman* > OE *cuman* > ModE *come* が出ているのに対して、ラテン語では *venire* が出ているのに似ている。つまり、印欧祖語の /g/ はゲルマン語では、グ

リムの法則により /k/ となる一方で、ラテン語では *g^wem- の第2要素の w に力点が置かれ、venīre が生じた。同様に、*dwo- から、ラテン語では w が発展して bis が派生した。さらに、ラテン語では、*dwo- から d が発展して、duo ‘two’ や dubius ‘doubtful’ < “hesitating between two alternatives” も生じている。もう一歩進んで、接頭辞 dis- の語源をさかのぼってみると、どうやら印欧祖語の *dwo- にたどり着くようである⁴。そもそも、この語根は ‘two’ という概念を持ち、英語の twig も元来「2つに枝分かれしたもの」が原義であるように、「2つに分かれる」>「分散」の観念を持っている。

3.1 英語の dis-

英語の dis- は大別して、

1. ラテン語から直接由来するもの
2. Latin dis- > OF des- > ModF dé(s)- というフランス語経由のもの
3. ラテン語 de- に代わって俗ラテン語の dis- に由来するもの
4. それ以外の造語

に分けることが出来る。また、意味に関しては、

An etymological element *dis-* occurs (1) with the meanings ‘apart,’ ‘asunder,’ ‘separately,’ as in *discuss*, *disperse*; hence (2) with privative, negative, or reversive force, as in *disaster*, *dissuade*, or with intensive force, as in *disturb*. As a living prefix from XV with such privative or reversive force it (3) forms compound verbs, as *disestablish*, *disinter*, *disown*, (4) with substantives forms verbs meaning to free or deprive of a quality or character, or reverse a condition, as *dischurch*, *disrobe*, (5) with adjectives forms verbs, as *disable*, (6) with substantives expresses the reverse or lack of, as *disquiet*, *disservice*, (7) with adjectives expresses the negative or opposite, as *discourteous*, *disreputable*, and (8) is used with intensive force, as *disannul*⁵.

という Hoad (1986:126) の記述にも見られるように、品詞によってその意味が異なっているが、本稿では *dis-* という接頭辞を含む動詞のうち、アスペクトという観点から (2) と (3) について考察することにする。

3.2 ラテン語の dis-

ラテン語では、compound verb の前つづりに用いられ、動詞本体部分が有声音で始まる場合、*dis-* の s は脱落するか、母音間では、r になる場合もある。

それ以外では、*dif-fero* のように同化を起こす場合もあるが、/p/, /t/, /k/, /s/ で本源動詞が始まる場合のみ *dis-* という形で現れる。次に、*dis-* の意味であるが、

Marque la séparation, l'écartement, la direction en sens opposés (*discurrō*, *dīuersus*), et par suite le contraire, la négation, et s'oppose à *con-*: *placeō/displaceō*, *similis/dissimilis*, *facilis/difficilis*, *concors/discors*, cf. *discondūcit*, *disconuenit*, *discooperiō*, formations populaires; sens que les langues romanes ont bien conservé. Quelquefois sert à renforcer le sens du verbe simple: *discupiō* << je crève de désir >>, *distaedet* << je crève de dépit >>, *dispereō*, *dispuget*, *dīrumpor*, etc. Correspond souvent pour le sens à gr. *διὰ* : *distendō* = *διατείνω*, *distō* = *διέστην*, *dīuerbium* = *διάλογος*.

Dī et *dē-* sont souvent confondus en bas latin. Lat. *dis-* se retrouve peut-être dans v.h.a. *zir-* (all.mod. *zer-*, élargissement de *zi-*, *ze-*)⁶

に見るように、

1. la séparation
2. l'écartement
3. la direction en sens opposés
4. le contraire
5. la négation

と要約できる。

さらに、Lewis and Short (1933:585) では、この語源については、IE **dwo-* 'two' がラテン語の *dis-* やドイツ語の *zer-* の由来であり、本来的には「二分化」という観念であったとしており、

- 1) *asunder, in pieces, apart, in two, in different directions* など *separation or division* の観念
- 2) 英語の接頭辞 *un-* に相当し、本源動詞の意味の反対動作または否定
- 3) 'exceedingly' の意で *intensive force*
- 4) *between* や *among* または *through*

の以上の4つのうち、3)を除いては「語源」の流れを汲んでいる。

さらに、Gaffiot (1934:534) では、

- 1) *division; dīduō, distrahō*
- 2) *séparation; discēdō, dīmittō*
- 3) *distinction; disquīrō, dīlingēns*
- 4) *achèvement/plénitude; dīlūcidus, discupīō, dispereō*
- 5) *négation; dissimilis, dispār, diffīdō, difficilis*

のように、5つに分類しているが、内容は Lewis and Short と同様である。

また、*dis-cēdō* という動詞に関しては、古典時代には、*dis-* の観念が強い場合には、'divide, separate' という意味になり、一方、全時代を通じて *cēdere* の方に重心が来ると、'part from any place or person, leave' といった意味を示すことから、古い時代には、*dis-* の語根の意味が強く反映していた例の一つであると思われる⁷⁾。

3.3 ドイツ語の *zer-*

次に、ドイツ語の *zer-* を考えてみると、印欧祖語の「二分化」という観念が、非分離動詞の前綴りで「散乱・分裂・破壊」などを意味するところへ続いてくる。例えば、*zerstreuen* 「まき散らす」 *zerteilen* 「分割する」 *zerreißen* 「引き裂く」 *zerstören* 「破壊する」 *zerfallen* 「崩壊する」 *zertrümmern* 「粉々にする」 *zerkleinern* 「小さく切る (砕く)」 などである⁸⁾。

4. *ab-*

4.1 印欧祖語の **apo-/ap-*

印欧祖語では本来、**apo-/ap-* は 'off, away' という意味で、ここから、以下のように派生している。

1. Germanic **af*: OE *of*, *æf* (> ME *of*, *of*-) ‘off’
2. OE *ebba* ‘low tide’ > *ebb*
3. Latin *ab*, *ab*- ‘away, from’
4. Greek ἀπό ‘away, from’
5. Suffixed (comparative) form **ap(o)-tero-*: Germanic **aftar* > OE *æfter* ‘after, behind’
6. Possible root **po(s)* ‘on, in’: a) Russian *po* ‘at, by, next to’ cf. pogrom; b) Latin *post* ‘behind, back, afterward’; c) Latin *pōnere* (‘to put, place’ < **po-sinere*) *sinere* ‘to leave, let’⁹

4.2 ラテン語の *ab*-

また、ラテン語では、接頭辞の *ab*- は、

1. l'éloignement
2. l'absence
3. la privation: *abdūcō*, *abeō*, *aborior*
4. l'achèvement: *absorbeō*, *abūtor*,

という4つの機能に大別される¹⁰。

また、*pōnō* の語源は、

Pōnō est issu de **po-sinō* > **pozno* > *pōnō*, composé d'aspect << déterminé >> indiquant l'action arrivée à son terme¹¹.

からも分かるように、この **po-* の部分はギリシャ語の ἐπί と ἀπό のグループの語頭の母音が脱落したものと考えられている¹²。

Lewis and Short (1933:1399) では、*porcēō* < *porrō* + *arceō* とあり、*porrō* ‘forward’ や ‘farther on’ の意は *ab*-に通じるものとされている。さらに、*pollūbrum* ‘wash-basin’ < *polluō* ‘pollute’ では、*adluō* > *alluō* ‘to flow near to, wash against, bathe’ と *dīluō* ‘to wash away, dissolve’ と比較してみると、接頭辞の意味が明確になる。つまり、本源動詞 *luō* は、ギリシャ語 λούω と同根で、意味は ‘to wash’ であるが、本来的には、*lauō* から派生したものである。

La racine signifiant << laver, baigner >> a donné en latin deux verbes, in en -a-, marquant d'abord l'état et s'employant absolument avec valeur réfléchie, l'autre à voyelle thématique en -e/o- marquant l'action et s'employant transitivement¹³.

語源的には、活用の種類によって「状態動詞」と「動作動詞」の区別があるが、後者の方から、prefixation による compound が多く生じ、-*luō* という形が現れた。例えば、*abluō* は ‘to wash away’ から ‘to cleanse, purify’ という意味を担ったが、これは *ab*- の意味をよく反映したものである。先程の、*polluō* とこの *abluō* を比較してみると、本来同じ根から発している接頭辞が、意味の上で全く異なった方向へ移行してしまう一つの例と見ることも可能である。つまり、「冒涇」と「聖め」という両極端の意味は、とりもなおさず、接頭辞の担う部分が非常に大きいのである。

4.3 *ab* と *post*

ab と *post* は、いずれも印欧祖語の **apo-* から出ている。**apo-* の前半の部分からは、ラテン語の *ab* ‘away, from’ や Germanic **af* から OE の *of* > ME *of* > ModE *off* が派生している。また、「引き潮」のことを *ebb* というのも潮が海岸線から離れて行くさまから来ており、同じく **apo-* から生じている。比較級語尾を伴った形が **ap(o)-tero-* > Germanic **aftar* > OE *æfter* ‘after, behind’ を経て *after* になる。もともとは、「あるところから離れて、ずっと後ろの方」が原義だった。

**apo-* の後半の部分からは、ラテン語の *post* ‘behind, back, afterward’ や *pōnere* ‘to put, place’ (< **po-sinere*: *sinere* ‘to leave’) が派生している¹⁴。

**epi/opi*

- 1) Latin *ob* ‘before, to, against’
- 2) Greek *ἐπί* ‘on, over, at’
- 3) Old Church Slavonic *ob* ‘on’ in Russian *oblast*
- 4) Prefix in Latin **op-* in **op-wer-yō* > *operiō* ‘to cover over’¹⁵

5. prefixaion による意味の対極

5.1 「上」と「下」

**upo* ‘under, up from under, over’

1. Germanic **upp-* > OE *up*, *uppe* > ModE *up*
2. Germanic **upanaz* ‘put or set up’ > OE *open* > ModE *open*
3. Germanic **ufana* ‘on, above’ > OE *bufan* ‘above, over’ > ModE *above*
4. Suffixed form **up-t-* > Germanic **ufta* ‘frequently’ > OE *oft* > ModE *often*
5. Extended form **upes-* > Germanic **ubaswo/*ubizwo* ‘eaves’ < “that which is above or in front” > OE *efes* > ModE *eaves*
6. Variant form **(s)up-* > Latin *sub* ‘under’
7. Latin *supīnus* ‘lying on the back’ < “thrown backward or under”
8. Greek *ὑπο* ‘under’¹⁶

印欧祖語の **upo-* は面白い性質を持っている。ゲルマン系では「上」を意味する語が派生する一方で、ラテン語やギリシャ語では「下」を意味する語が派生している。さらに、*above* や *over* を意味する OE (a)*bufan* からは ModE *above* が生じたのだが、もともと OE では *be* ‘about’ + *ufan* ‘up’ > *bufan* という形であった。*above* と同根の *over* は OE では *ofer* で、本来は **ufa(r)* で *ufan* の比較級だった¹⁷。

ラテン語の *sub-* は「下」を意味するが、「上下」というのは、垂直方向という観点からすれば、共通性があり、さらに「支える」という意味では、「下から上へのベクトル」と見ることもできる。それゆえ、ゲルマン系の「上」とラテン語の「下」が全く相容れないというわけでもないのである。

ドイツ語でも、前置詞 *ob* + 3 格「～の上方に」は、副詞 *oben* や *offen* さらに *über* などと同源である¹⁸。

ModE *oft* も **upo-* から派生しているが、「頻度が高い」の意味は同根の *over* も ‘excessive’ の意と関連があるとされる。またドイツ語でも、*ob* と同根で原義は「過度」とある¹⁹。これと関連して、**upelo-* < **upo-* は、OE *yfel* (> ModE *evil*) は、‘bad’ の意味であったが、もともとは「限界を超える、

常道を逸脱する」が原義である²⁰。

また、ラテン語の *sub* は「下に」の意味だが、語源的には *ex* (= *eks*) + *up* で「(上から) 下に」が原義らしい²¹。このように、同じ語根から、反対の意味が派生するのは、とりもなおさず、対立する2つが対になっているということが最大の理由であろう。

5.2 「開」と「閉」

5.2.1 ラテン語の *aperiō* と *operiō*

具体的に *open* と *close* に相当するラテン語は、それぞれ *aperiō* と *operiō* であるが、その語源を考察してみることにする。

Aperiō: unwrap, uncover, open, reveal, demonstrate (cf. older English discover = tell); *operiō*: close, cover. Most probably < **ap-uer-iō* < **uer-*: bend about, draw about, pull about, > bind, wrap, enclose (v. *vertō*, *vereor*, English *wrap* &c.): sk. *vyñōti* (covers, wraps, shuts), *apavyñōti* (unwraps, opens), *apivyñōti* (wraps, covers, shuts); Lit. *atveriu* (open), *ūzveriu* (shut); OE *waru*, ModE *wares* (=bundle, pack). The ultimate sense of **uer-* being properly ‘make go about’, the word might be used of either opening or shutting (as in Lit. *veriū*). A door may be regarded either as that which ‘turns’ (on its thongs, pivots, or hinges), or as that which shuts or ‘encloses’²²

ラテン語では、「開ける」も「閉める」も **wer-* という語根を含んでいる。この語根は ‘to turn, bend’ が原義で、ラテン語の *vertō* ‘to turn’ も同根である。*aperiō* は **ap-uer-iō* < **ab-wer-yō* という語構成をしていて、一方、*operiō* は **op-uer-iō* < **ob-wer-yō* という語構成とされている²³。

また、リトアニア語も *atveriu* (open) と *uzveriu* (shut) が対になっていて、前つづりの違いによって「開閉」の意味付けを行っている。原義的には、印欧祖語の **wer-* という語根は、「開閉」のいずれにも用いられていたと考えられる。

A door may be regarded either as that which ‘turns’ (on its thongs, pivots, or hinges), or as that which shuts or ‘encloses’²⁴ などは、事象の本質として、ドアの開閉のように、背中合わせの出来事を言語で表現する際に、前つづりという方法をとった一例に過ぎないといえよう。

5.2.2 ドイツ語の *aufmachen* と *zumachen*

現代語の例として、ドイツ語では、*aufmachen* と *zumachen* に関しては、本源動詞の *machen* は共通で、異なる前つづりを付けることによって反義語をなしている。更に、ドイツ語の *auf* は英語の *up* と同根であるから、*auf* は *offen* を含んでいることになるので、非常に合理的な語構成をしていることが分かる。

5.2.3 フランス語の *ouvrir* と *couvrir*

Lewis and Short (1933:135) では、ラテン語の *aperiō* は *ab-pariō* ‘to take away from’ から、また、*operiō* は *ob-pariō* ‘to put upon’ から生じたという説が引かれてあるが、「これは古い説明である」というコメントが付されてある。

一方、Ernout et Meillet (1985:38) では、*aperiō* も *operiō* も、一般にはそれぞれ **ap-ueriō* と *op-ueriō*

から生じたと考えられている。

また、フランス語の *ouvrir* と *couvrir* の語源に関しては、それぞれ、

ouvrir:

Lat. Pop. **operire*, altération qui se trouve à la fois en gallo-roman, en catalan et dans de nombreux dialectes italiens, du lat. class. *aperire*, sous l'influence de *cooperire* << couvrir >>. Le lat. class. *operire* << couvrir >> ayant été remplacé par *cooperire*, *aperire* pouvait subir l'attraction de celui-ci, grâce à la polarité des deux notions. It. *aprire*, esp. *abrir*.²⁵

couvrir:

Lat. *cooperire* << couvrir complètement, de tous les côtés >>, comp. de *operire* << couvrir >>. Les langues romanes ont toutes laissé tomber le verbe simple au profit du comp., au sens plus énergique: it. *coprire*, esp. *cubrir*.²⁶

とある。「開閉」という事象に関して、英語でも *overt* と *covert* という対の言葉があるが、これらは、フランス語の *ouvrir* と *couvrir* の過去分詞と関係がある。ラテン語では、*aperiō* と *operiō* であったが、語頭の *a* は *ab* から、*o* は *ob* から来ているという意識が、時代とともに薄れ、特に *cooperiō* という強調の接頭辞がついた形が現れてからは、次第にこちらが優勢になっていった。とりわけ「開閉」というこの2つの意味の二極性から、*aperiō* は、*cooperiō* の *co-* を伴わないものであるという認識が芽生え、ついには、*aperiō* は *operiō* へとシフトしてしまい、接頭辞 *co-* と対立するという意味区別の形式がフランス語では生じた。接頭辞による「開閉」の意味の区別は、歴史的に考察すると、フランス語内部にも見られる現象であった。英語の *overt* は、フランス語 *ouvert* が、*covert* は *couvert* がそれぞれ起源である。

なお、ラテン語の *aperire* は、イタリア語は *aprire* で、スペイン語は *abrir* であり、対語のけん引による語頭の変化は見られない。

6. おわりに

本稿では、アスペクト的な観点から、動詞の接頭辞の意味的役割を考察してきた。英語の *un-* とドイツ語の *ent-* では、ドイツ語の一部を除き、本源動詞との同化を起こさないことを見たが、これは単なる偶然の一致とみなすことには抵抗がある。また、ラテン語の *dis-* も英語の *dis-* も、印欧祖語の **dwo-* を反映したもので、「2つに分割する」という観念を持ち、動詞の前つづりとして重要な意味役割を担っている。

印欧祖語の **apo-* からは、ラテン語の *ab* と *post* が生じているが、英語の *after* も同根である。「～から離れて」という意味は、「前方」ではなく「後方」へ向かうベクトルとなって *post* や *after* の派生が起ったと考えられる。

一方、印欧祖語の **upo-* からは、ゲルマン語では「上」を意味する語が派生しているのに対し、ラテン語やギリシャ語では「下」を意味する語が派生しているのだが、実はこれも「上下」という垂直方向のベクトルという点では共通性があると見ることも出来る。

「上下」に関するベクトルの方向の対立と同様に、「開閉」という事象にも同根の本源動詞に異なった接頭辞を冠することによって、正反対の意味を担わせる例が見られる。ドイツ語の *aufmachen* と *zumachen* がその例であり、ラテン語の *aperiō* と *operiō* も語源的には同様であるが、「開閉」という動作に方向性を与えることで、その意味を区別しているのである。また、カギを開ける閉めるという動作も、現代英語では、*lock* と *unlock* という prefixation による意味の区別が行われている。開ける動作も閉める動作も、印欧祖語においては、本源動詞は同じで、prefixation によって意味を区別

していたという仮定は、ラテン語に加えサンスクリット語やリトアニア語などの痕跡から十分に証明されるであろう。

註

1. Yumoto, Y. "Verb Prefixation on the Level of Semantic Structure," p.193
2. 下宮忠雄「ドイツ語語源小辞典」p.174
3. 小学館「独和大辞典」p.214
4. Pokorny, pp.228-32
5. Hoad, p.126
6. Ernout et Meillet, *Dictionnaire étymologique de la langue latine*, p.176
7. Lewis and Short, p.585
8. 小学館「独和大辞典」p.2604
9. Watkins, C. *The American Heritage Dictionary of Indo European Roots*, p.3
10. Ernout et Meillet, p.2
11. *ibid.* p.520
12. *ibid.* p.518
13. *ibid.* p.344
14. *The American Heritage Dictionary of Indo-European Roots*, p.3
15. *ibid.* p.17
16. *ibid.* pp.72-3
17. 研究社「英語語源小辞典」pp.296-7
18. 下宮忠雄「ドイツ語語源小辞典」p.127
19. *ibid.* p.128
20. Pokorny, p.1107
21. *ibid.* p.1106
22. Tucker, *Etymological Dictionary of Latin*, p.20
23. Ernout et Meillet, p.38
24. Tucker, p.20
25. Béchade, Hervé-D. *Phonétique et morphologie du français moderne et contemporain*, p.453
26. *ibid.* p.166

参考文献

- Bauer, L. (1993) *English Word-Formation*, Cambridge University Press.
- Béchade, Hervé-D. (1992) *Phonétique et morphologie du français moderne et contemporain*, Presses universitaires de France.
- Bloch, O. and Von Wartburg, W. (1989) *Dictionnaire étymologique de la langue française*, Presses universitaires de France.
- Ernout, A. and Meillet, A. (1985) *Dictionnaire étymologique de la langue latine*, Klincksieck.
- Ernout, A. and Meillet, A. (1974) *Morphologie historique du latin*, Klincksieck.
- Gaffiot, F. (1934) *Dictionnaire latin-français*, Hachette.
- Hoad, T. F. (1986) *The Concise Oxford Dictionary of English Etymology*, Clarendon Press.
- Holthausen, F. (1934) *Altenglisches Etymologisches Wörterbuch*, Carl Winter
- Katamba, F. (1994) *Morphology*, Macmillan.
- Klein, E. (1966-67) *A Comprehensive Etymological Dictionary of the English Language*, 2 Vols, Elsevier.
- Kluge, F. and Seebold, W. E. (1995²³) *Etymologisches Wörterbuch der deutschen Sprache*, Walter de Gruyter.
- Lass, R. (1997) *Historical Linguistics and Language Change*, Cambridge University Press.
- Lewis, C. T. and Short, C. (1933) *A Latin Dictionary*, Oxford at the Clarendon Press.

- Matthews, P. H. (1993) *Morphology*, Cambridge University Press.
- Meillet, A. (1964) *Introduction à l'étude comparative des langues indo-européennes*, University of Alabama Press.
- Meillet, A. (1977) *Esquisse d'une histoire de la langue latine*, Klincksieck.
- Morita, S. (1990) "An Essay on Aspect and a Nasal Infix," The Society of English Studies at Waseda, *Lingua* Vol.12 pp.2-14.
- Morita, S. (1992) "An Essay on Perfect and Aspect," The Society of English Studies at Waseda, *Lingua* Vol.14 pp.81-97
- Morita, S. (1995) "A Comparative Study of the Meaning of *tangō* in Latin, *toucher* in French, and *touch* in English," Bulletin of Yamanashi Women's Junior College, Vol.28 pp.19-26
- Morita, S. (1996) "A Comparative Study of the Meaning of 'Sit' in English, Latin, French, and German," Bulletin of Yamanashi Women's Junior College, Vol.29 pp.1-13
- Morita, S. (1997) "A Thought on a Nasal Infix in Latin," Bulletin of Yamanashi Women's Junior College, Vol.30 pp.1-13
- Morita, S. (1998) "Prefixes in Latin as an Aspectualizer," Bulletin of Yamanashi Women's Junior College, Vol.31 pp.1-20
- Morita, S. (1999) "Suffixes in Latin as an Aspectualizer," Bulletin of Yamanashi Women's Junior College, Vol.32 pp.1-17
- Pokorny, J. (1989) *Indogermanisches Etymologisches Wörterbuch I, II*, Franke Verlag Bern und Stuttgart.
- Skeat, W. W. (1892) *Principles of English Etymology*, Vol. I-II, Oxford University Press.
- Tucker, T. G. (1931) *Etymological Dictionary of Latin*, Ares Publishers Inc.
- Yumoto, Y. (1997) "Verb Prefixation on the Level of Semantic Structure," *Verb Semantics and Syntactic Structure*, (edited by Kageyama, T.) pp.177-204, Kuroshio Publishers, Tokyo.
- Watkins, C. (1985) *The American Heritage Dictionary of Indo-European Roots*, Houghton Mifflin Company.
- Walde, A. and Hoffmann, J. B. (1982) *Lateinisches Etymologisches Wörterbuch*, Carl Winter.

相良守峯 (1979) 「ドイツ文法」 岩波
 下宮忠雄 (1992) 「ドイツ語語源小辞典」 同学社
 中島文雄・寺澤芳雄共編 (1997) 「英語語源辞典」 研究社

(1999 年 12 月 3 日受理)